

た。小太鼓と大太鼓のアンサンブル、鬼太鼓の力強さ等、素晴らしいの一語につきます。

この日で大会は実質的には終わったわけですよ

で、私の駆け足の見聞記もこれで終わらせてもらいます。なお一言、私達を参加させて下さった京大関係者の皆様にあつく感謝いたします。

イフラ東京大会「国際図書館情報総合展」を見て

数理解析研究所 隅 田 雅 夫

毎年8月国際図書館連盟の世界大会が北米、ヨーロッパを中心に開催されているが、今回初めて日本で（アジアでは2回目）開かれ、参加する機会を得たので、大会と並行して催された展示会「国際図書館情報総合展」について簡単に報告する。

この展示会は8月24日より4日間の日程で、会場はホテル・ニュー・オータニ、有料で一般にも公開されたが、4日目のニュースでは最終的に1万5千人をこえるだろうと言われるほどの盛況だったようだ。初日午後1時半からオープニングし、テープカットが行なわれた。（写真参照）

出展者はリストによれば約100社にもなり、そのうち4分の1が海外からのものである。図書の出版、印刷、取次などの各社、書店、古書店、図書館機器、マイクロ写真、コンピューター関連の技術やシステムのメーカーやディーラー、内外の図書館関係を含む種々の団体や協会とその広報機関など多岐にわたる内容で、そのほか実演を含む和紙の製造、和装本の修復、浮世絵版画の刷り工程など特に外国人を意識した出展もあった。

展示会では時間の制約もあり、情報処理技術や図書館システムを中心に見学した。したがってここでは他のことについてはふれていない。はじめての世界大会ということで、この分野での外国からの出展を期待していたが、国内取扱いのものを除けばわずかに2件、OCLCとCLSIであり、しかもCLSIはパンフレットの配布のみであった。OCLCでは、CJK（Chinese/Japanese/Korean）端末による漢字処理の実演があり、他に東京、大阪でもシステムの説明会を開いている。

まず第一に印象に残ったものは、やはり国内で

一堂に会するのは初めてといわれたCD-ROMであろう。CD-ROMとは、レコード屋で売っているコンパクトディスク（CD）と同じようなもので、ディスク上には音楽信号ではなく、コンピューターで扱える文字などデジタルデータがはいっており、PC-9801などのパソコンに接続し周辺機器として使う。しかし、音楽を聞くのと同様、すでに入力済のデータを読みとるだけ（ROM：Read Only Memory）で、データの書きこみや修正は今のところできない。あの小さな円盤に550MBもの大容量（パンフレットによれば英和辞典100冊）をもっているうえに、複製の費用が安価なことから、オフラインデータベースや電子出版のメディアのひとつとして最近急速に注目をあびているものである。

今回も、百科事典、用語事典、職業別電話帳などのデータを検索していたが、前二者はすでに市販されている。さらに音声や映像とも組合せて、ひとつのCD-ROMにしたものも試作品として紹介されていたが、教育用などに期待されているという。なお、CTS方式（Computer Typesetting）



で編集された本は簡単に CD-ROM 化でき、また 5, 6 年前から本の編集にはほとんどこの CTS 方式が用いられているとのことだった。

CD-ROM でもっとも興味深かったのは、話に聞いていた LC-MARC の CD-ROM 版である。1 枚のディスクに 100 万件のレコードが入っており、著者や書名などで検索して表示し（デモではカードフォーム）、必要なデータは普通のハードディスクやフロッピーディスクに保存して、その後のデータ処理に使えるという。これは、われわれが大規模コンピューターでしかできないと考えていた MARC による目録作業を、パソコンだけで処理できることを示している。この LC-MARC の CD-ROM は、この展示会のために米国より借りてきたということだった。

次に特徴的だったのは、パソコン、ミニコンによる多くの図書館システムで、日本ではこの数年間で急増した分野である。それらをパンフレットによって列記すると、BOOK-MAN, LICS, LOOKS, LOOKS/U, ILAS, LIMS/PC, LMS, CALIS, MINI-DB II ライブラリアン、図書、CAPS 図書情報システム、IBM システム/38 図書館システムなどがあるが、すべて小規模、中規模図書館用で、多くのブースでカラフルな画面が目についた。なかに、FACOM 9450Σ の簡易言語 EPOACE で図書館システムを作成中だというソフトメーカーがあった。また、取次店が提供している図書の受発注システムも一部の図書館や書店で使われているという。

そのほか、図書館関係でいえば、光ディスク、種々のデータバンクやデータベースサービス、大規模図書館システムや学術情報センターなどのネットワークシステムが展示されていたが、出展に参加していないところもあり、例えば図書館システムの大手メーカーでは、富士通、日本電気、三菱電気などの展示は見られなかった。

最後に、印象的だったことを 2 点だけあげてみたい。ひとつは、現在日本 IBM が早稲田大学

で開発中の図書館システム—DOBIS/LIBIS/WINE システムで、このシステムではとくに図書館利用者のための画面が用意されていて、目録検索のほかに自分の貸出記録の照会や、図書館員へのメッセージの入力ができるようになっており、また留学生用に複数言語が選択できるようになっている。簡単なことだが、図書館システムの設計思想について再考させられた思いがした。もう 1 点は、データベース振興センターが三菱総合研究所に委託して図書館間相互貸借システムを開発中とのことで、具体的な内容はわからなかったが、図書館活動が館内システムではなく、こういう形で、しかも民間の機関によって取り上げられるのは、国内でははじめてではないだろうか。

以上、展示会の一部、それもコンピューター関係に限定し、報告というよりも個人的な印象を述べたものになった。大会自体との関連でいえば、こうした情報処理技術の発展に、図書館がどう対応していくのか。これは、国立劇場で行われた大会開会式で永井大会組織委員長が述べたところによれば、「21世紀の図書館」（大会メインテーマ）に向かっての二つの課題のうちのひとつになっている。（ちなみに、今ひとつは「第3世界（発展途上国）の図書館振興」で、これも今回の IFLA 大会参加でいろいろ考えさせられた）。また、大会での発表や発言の中でも、光ディスクなどの新しい技術への関心は総じて高いものであった。図書館界は、先進国、発展途上国を問わずいろいろな意味で、今までにはなかった新しい「産業革命」の時代にはいつているのかもしれない。

最後に、蛇足になるかも知れないが、詳細なコンピューター導入計画の発表のなかで、ある発展途上国の代表者の言った次のような言葉が、いまでも強く印象に残っている。「われわれの計画はまだ理想にすぎないが、細心の注意を払って立案しなければならない。われわれには失敗や試行錯誤は許されないのだから」。